



青柳文藏傳記資料

二

洋学文庫

文庫8

A 311

2



43-7209 (2212)



青柳文藏百像記

處士青柳文藏性闊達少抱大志嘗負笈遠來江戶  
其初學醫而今之醫者非也非其志也改而就仕而  
今之仕者非也非其志也為商而賈乎熙々穰々或  
往或來操奇贏以爭錐刀之末權子母以近三倍之  
市菲衣惡食唯利是年亦不免為守錢虜也非其志  
也為農而耕乎水犂火耕致三時之務手胼足胝盡  
四支之敏歲取十千家餘三九其稼其廩如京如陵  
亦不免為多田翁也非其志也退而居陋巷簞食瓢  
飲讀書自樂方是時親者日踈而朋友亦路人如也

又復翻然改志曰如是則溝中瘠耳可以已乎不可  
已也聖門有顏回亦有子貢則不受命而貨殖是或  
一道也丈夫在世何其可長貪乎又一日讀棠陰以  
事竊歎曰方今聖明在上改刑南清雖然吏非一人  
人非一心則人々不能皆正焉其間避權勢報恩仇  
以及女謁賄賂干請之不以公豈謂必無乎况且怯  
懦愚慈之民對獄吏則頭搶見徒隸則心惕書不盡  
言言不盡意情真理確而啣冤一世者豈謂必無乎  
是乃在上之責也而余輩任之亦或一道也於是專  
治律令之學而精於訟牒法以是名稱一時世人每

有爭訟事輒必請君書獄君必原父子之親立君臣  
之義而權之校輕重之序測淺深之量以別之以小  
大審情偽法類兼明情理並通於是平酷吏不能容  
奸而良民免於罪戾君遂以是成一門戶道行家富  
得以酬夙志而終始以趨急伸竟為意故多所施  
濟者云今茲辛巳君年六十一其徒為圖肖像請余  
作記且以賀其本命壽余謂曰君不為醫施藥而能  
趨人之急不為仕行道而能伸人之冤故不商不農  
亦家溫而養優若其閑也結社而會友聚首一室點  
茶相懽或又擁萬卷擬百城是皆餘慶所致不可不

賀也。歲十一月廿八日君壽在。是其徒來徵書。此以  
與之。君姓青柳。以名文藏。字茂明。號東里。與之盤井  
郡。東山松川村人。

文政辛巳十一月冬至日江戶朝川島五島氏撰并  
書

(肖像)

友人七州庵文山樓寫

處士青柳文苑性剛道少抱大志嘗負笈遠東江戶其於學區而今之  
匠者非也非其志也改而就仕而今之仕者非也非其志也若商而實  
熙之穰或往或來操奇贏以爭錙刀之末權子母以近三倍之市菲  
衣惡食唯利是爭亦不免為守錢家也非其志也若農而耕平  
水穡火耕致三時之務手胼足胝晝四支之敏歲取十千家給  
三九其稼其度如早如後年不憂為多田翁也非其志也退而居  
陋巷甘苦之良孰節讀書自樂方是時親者日誅而朋友在路  
人如也又復翻然改志曰如是則溝中瘠耳可以已乎不可已也  
聖門有顏回并有子貢則不受命而貧殖是或一道也丈夫  
在世何貴可長貧乎又一日清堂陰以事定藉藪曰方今聖明  
在上刑以肅清雖然吏非一人人非一心則人々不能皆正焉其間

避權勢報恩仇以及女謁賄賂干請之不以公立謂必無平  
此且怯懦愚戇之民對獄吏則頭搶身徒隸則心惕書不盡  
言言不盡意情真理確而呻以竟一世者豈謂必無乎是乃在  
上之責也而今輩任之亦或一道也於是專治律令之學而精於  
訟牒法以是名稱一時世人每有年訟案輒必請君書獄君必  
原父子之親之君臣之義而權之校輕重之序測淺深之量  
以別之比大小審情依法類辨明情理並通於是乎酷  
吏不能容奸而良民免於深戾君遂以是成河內之道行家  
富得以酬夙志而終始以趨廷伸冤為意故取多所施濟  
者云今茲辛巳君年六十一其徒為國有像請余作記且以

賀其本命壽余謂曰君不為匡施藥而能趨人之急不為仕  
行道而能伸人之冤故不尚不曲不長亦象溫而美良優若其用也  
結社而會友取聚道一室點茶相懽或又推萬卷擬百城是  
皆故塵所歎不可不賀也歲十一月廿八日君壽在是其徒奉徵  
書此以誌之君姓青柳氏名文苑字茂明號采里奧之盤井  
居東山松川村人

文苑辛巳十月有冬三日江戶朝川與五鼎氏撰并書

友人七州庵文山撰序



青柳文藏字茂明東里ト號ス醫術師小野寺三達ノ  
子ニシテ母ヲモウシ小野寺嘉平ノ長女ナリ兄弟六人アリ  
長男喜三郎ハ家ヲ継キ長女ハ仙臺藩士小山作三郎ニ嫁シ  
二男長吉ハ膽澤郡水澤町ニ分家セラレ松川ヲ姓トナス  
二女ハ本村依藤氏ニ嫁ス文藏ハ其三男ニシテ寶曆十  
一年九月廿五日ヲ以テ生ル父三達ハ同郡摺澤村青柳家  
ヨリ同郡門崎村(元神崎村後ニ門崎ニ改ムト云フ)小野家ノ養子  
トナリ醫術ヲ業トス門崎村ハ僻阪ノ地ナルヲ以テ業務力上  
不便ヲ感ジ後テ松川村字一市町ニ移住シテ其業ヲ営メリ  
長男喜三郎醫術ヲ嫌忌シ屋號ヲ神崎ト改メ商  
業ヲ營ミ維新ノ際屋號ヲ以テ其ノ姓トナス神崎  
ト稱セリ文藏幼ニシテ習字句讀ヲ諏訪山少林寺ニ

学び經書ノ講釋ヲ聞キシガ素ヨリ聰明伶俐ニシテ一  
聞キ十ヲ知ルノ奇才アリシカハ聞モテ其大体ニ通シ特  
ニ詩文ニ妙ニシテ十二才ノ頃ニハ能ク平仄ヲ記臆シ巧ニ  
絶句ヲ賦シ又物事ニ動セス言論ヲ好ミ今猶郷里ノ  
古老ノ語ル所ニヨレバ負ケ嫌ヒノ性質ニテ平日人ト争  
論シテヤリ込メラル、コトアレバ放言シテ曰ク何ヲ抜カスゾ燕雀  
何ゾ鴻鵠ノ志ヲ知ラシヤト言フコトヲ御主等ハ知ルマイ  
ト父ハ此剛氣ト奇才トヲ愛シ段醫學ヲ修メシメ之レヲ  
以テ我家ノ醫業ヲ襲カシメント登米郡 ~~登米~~ 登米谷町醫師  
飯塚保安ニ師事シ斯業ヲ修メシメント ~~タリ~~ 飯塚氏ハ学  
術完備當時流行ノ名醫ニシテ氏ノ門前常ニ市ヲテシ  
診療ヲ乞フノ患者數百人ヲ為メ寢食ニ遑アラザリキ

或日文藏師ニ從ヒ患家ニ行キ帰途低頭平身師ニ伺ヒ  
タキコトアリト師之ヲ顧ミ何カト問フ文藏曰ク師患家ノ  
為メ寢食ヲ忘ル年度ノ收入金何程アリヤト師怪ニ答フ  
一ヶ年ノ收入金一千圓ニ垂ントセリ文藏曰ク師患家ノ  
タメニ寢食ニ遑アラズ醫術ハ仁術ナリト虽モ限リアルノ生命  
ヲ以テ限リナキノ業ニ從事シ僅カ千金ノ為メニ師ノ生命  
ヲ如何セント人ハ生命ヨリ貴キハナシ一金ヤ限リアル數百  
ノ患者ヲ救ハシカタメニ生命ヲ危フセン一ハ余ノ本旨ニ  
非ストナシ師ニ暇ヲ請フ師ハ之ヲ快諾シテ一篇ノ書簡ヲ  
添ヘテ父ノ許ニ帰還セシム文藏齋ス所ノ書簡ヲ家  
嚴ニ呈ス父之ヲ披讀シ忽チニシテ大ニ怒ル汝ノ暴言  
壯語師ニ對スルノ不敬不遜悖禮モ亦甚シ汝ノ如キハ



師恩ヲ知ラサルモノ又能ク父母ニ耻辱ヲ興フルモノ不幸モ亦甚シト云フヘシ汝ハ余ノ子トシテ養フ能ハス汝ニ勤當ヲ興フヘシ早ク此家ヲ退去スヘシト文藏之ニ對ハシ申シ及問シテ曰ク勤當トハ何ゾト父暗涙訓諭シテ曰ク勤當トハ父母ノ恩、師恩ヲ知ラサル無禮者ニ對シ父子ノ縁ヲ絶テ再會セサルコトヲト文藏啼泣余ハ父母ガ養育ノ恩、師ガ教育ノ恩ヲ忘ル、モノニアラス唯志シ所ノ見解ヲ異ニスルニ後日志業ヲ遂ゲテ其恩ニ報イシコト志ヲ決シ默然トシト左様ナラノ一語ノ下ニ無一文ニテ江戸ニ出立シ遊學ノ途ニ就ケリ茲ニ碩儒井上金峨ノ塾ニ入り業ヲ受ク金峨其才ヲ愛スト虽モ貧ニシテ之ヲ養フコト能ハス文藏又思ヘラク書ヲ讀ム資ナカルヘカラスト是ヨリ銳意産業

ヲ経緯シ大ニ産ヲ起シ生計頗ル餘裕アリ於是大志ヲ抱ケル文藏ハ縱令刀圭ノ業ハ廢シタルモ醫書ニマサル仁術ヲ社會ニ施シ父母ノ恩ニ報ゼント醫書千餘卷ヲ購讀シ又之ヲ學資ナキ醫學生ニ貸讀セシメ敵醫師ノ養成ニ務メ和漢ノ經史ヲ涉獵シ古今ノ律書ヲ研究シテ人權ノ保護ニ務メ專ラ公事師ノ業ニ從ヘリ強者執ヒテ以テ弱者ヲ制セントスルモノアレバ之ヲ助ケテ大ニ義侠心ヲ振テ訴訟人ノ來リテ依囑スルモノアリテ之ニ應スルトキハ一モ敗ヲ取リタルコトナシト故ニ報酬日ニ増シ月ニ加リ遂ニ家産巨萬ニ達シ漸ク羽翼ヲ擴大シテ富將ニ陶朱猗頓ヲ凌カントス然レ彼ノ剛氣ハ一旦勤當ノ身ナレハ父母ノ許諾ヲ得サレハ小野寺ノ姓ヲ名乗ラズト自ラ父ノ生家ノ姓ヲ取リ

青柳ト称シ居宅ヲ亀井戸ニ設ケ茲ニ住居シ名聲天下ニ  
噴々たり文藏北豊嶋郡高田村新倉氏ヲ娶ル一子アリ  
勇治郎ト云フ早世セリ甥喜三郎ヲ以テ養嗣子トナセリ  
身放蕩ノ故ヲ以テ後チ品川ニ別荘ヲ設ケテ百戸ノ借舎  
賃料ト若干ノ資金トヲ分チテ隱居セシム後チ店舖ヲ  
開キ江戸鴉金ノ貸方ヲ創始セリ文藏敬神奉佛  
ノ念ニ厚ク中臣氏ノ子孫トシテ大ニ天兒屋根神ヲ遠祖  
トシテ奉祭シ又各神社ニ寄附シ菩提所宗松寺ノ如キハ  
其寄附ニナルモノ最モ多シ祖先祭祀~~料~~料トシテ田地經  
文類若干ヲ奉納セリ其著書トシテハ續諸家人物志  
及諸家人物志拾遺東里詩文集其他種々アリタルモ  
神崎家ハ文化年間ヨリ今ニ至ルマテ四回ノ火災ニ罹リ

其遺物ヲ烏有ニ帰セシメタルハ遺憾トスル所ナリ偶々  
上州高崎領民天候順ヲ失ヒ農民大ニ苦ムトアリ  
蒲生君平ノ德憑スル所トナリ究民ヲ救恤セリト  
時ニ文藏齡七十二垂ントス家資巨萬ヲ累子購讀  
ニタル書籍積シテ山ヲナシテ書齋ニ充ツ之ヲ藩ニ納メテ  
世ノ学生ノ負困ニシテ志ヲ達スルコト能ハサル余カ少時ノ  
如キモノニ讀マシムルニ如カズト藩ニ請フテ仙臺城下内ニ  
數畝ノ地ヲ得以テ文庫ヲ設置シ和漢古今ノ典籍數  
萬卷ヲ備フ青柳館ト称シ松崎惺堂ヲシテ碑文ヲ撰  
マシメ其門前ニ建ツ松川村ニ於テモ地ヲ購ヒ義倉ヲ設ケ  
米穀一万餘石ヲ備ヘテ領民救荒ノ資ニ充ントテ  
之ヲ官府ニ納メ以テ國恩父恩并師恩ニ報セトセリ

今ニ青柳倉記ハ依然トシテ其門前ニ存置セリ時執カノ  
 風雲見絶大ノ手腕大成功ヲナシ各般ノ事業ヲ終ヘ  
 五十年餘ヲ経テ錦ヲ着テ故郷ニ帰ル文藏ハ茲ニ  
 親戚故舊知人ヲ招待シ大盛宴ヲ張り久濶ヲ謝シ  
 夫レヨリ父母ノ墓碑ヲ建設シ銘ヲ蒲生秀實ニ撰マ  
 シメ瀧澤山宗松寺ニ於テ大法會ヲ執行シ遠近ノ男女  
 集リ来リテ慶賛スルノ數万人佛事ヲ終ヘテ上京セル  
 文藏ハ七十有九歳ヲ一期トシテ溘焉世ヲ逝ラル嗚呼悲哉  
 江戸北豊嶋郡高田村金乘院ニ葬ル太田錦城撰文ノ  
 墓碑アリ一時江戸近郷將ニ昇天ノ勢ヲ以テ雄飛セシ  
 文藏ノ最後ハ一子ナク繁昌ノ幻影忽チ雲散シテ不幸ノ  
 暗霧ニ掩ハシ永ク其ノ跡ヲ見ルコト能ハサルハ遺憾トスル所ナリ  
 右ハ本村有志長沢勇作ノ起稿ニ係ルモノ御判讀ヲ乞フ

一重は啓て下残事ニは對するハ許さざる可し此の  
 府珍重ノ事有るに隨テ私共ニ事々此レトシテ其  
 事々然レ主人ハ後金信用ノ事ニ此レハ此レ居ル  
 事々當暮ニ事々此レハ此レ此レ此レ此レ此レ此レ  
 上レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ  
 可レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ  
 為明ニ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ  
 事々此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ  
 義此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ此レ

此後不及年亦如及年例申す

大橋多膳

十月廿四

直行花押

信長平右衛門

誠花押

青柳久花押

此後平右衛門大内帯刀の家系なり

大内帯刀家系借尹人村松孫四郎村松長孫伏屋平  
 右衛門中は左衛門織國分傳古也の中は孫中村源右  
 衛門孫川庄右衛門連名押印も我共二回も持要用  
 金に於て五兩法平十文重也也當長十有百限金に於て  
 付是月金先歩我利息割合も加え利息急に返還  
 可申す云々大保三辰年二月文藏殿我の許者あり  
 如仙居ノ青柳孫死ス

墓慕也孝子慕父母乃其所葬土謂之墓焉可不碑  
焉而表之哉碑焉而表之欲以傳諸後之世則其文  
必需諸當時善辭者孝子之心也陸奧盤井郡東山  
有鑿者曰三達翁諱靜幹姓中臣氏也本族稱青柳  
生於摺澤贅於神崎小野寺氏徙松川而業醫焉性  
愿謹其於術也以人之司命最致忠誠而期於不誤  
故東山遠近一時稱小野寺三達翁而無不依賴享  
年七十二而終於天明甲辰四月十二日葬於松川  
宗松寺地子六人長子喜三次長吉次文藏餘皆女

也文臧復舊稱青柳居江戶其兄欲建碑而命文臧  
需具文當時善辭者也故因人而請之余余於久無  
知與不知苟有好善事而來問焉則必告誨輒為之  
語曰赤子之心無不慕其父母啼笑歌舞唯親是視  
若家貧不能育之棄諸野而猶不知怨其啼呼聲息  
則疲睡飢臥唯求乳之夢時見其母其口不能言其  
啼呼聲發則如慕其父如慕其母以是觀之孝誠自  
然性之所存赤子之時而可見矣少之時好色慕少  
好既慕其妻子慕其所從事夫所慕時移歲變而慕  
父母之心不復赤子人之初生誰非赤子因本其性

則人人有孝心有至誠而其行皆以人欲之蔽時移  
歲變往而不反唯大人不喪其赤子之心者是以全  
其性雖衆人乃其性皆善善將焉見之夫顧慈父慈  
母之墳墓望松柏森如而常窳窳則心悲氣慘其孝  
誠自然性之所存莫不必發見也今其所以垂教於  
後世乃在碑焉而表之配小野寺氏今方壽考乃期  
百年而祔焉文臧買田若干畝施入於寺充其祭祀  
料其銘曰  
所生是思謹而愿斯方顧其墓慕能莫悲  
文化八年歲次辛未夏四月

下野 蒲生秀實撰

江戸 大梁原信書

孝子

小野寺喜三郎

建

青柳文藏茂明

多に居製

金舞院青柳文藏息ノ墓  
の表面

文花ノ墓ト向ヒ合ヒテアリ根付石高廿五  
尺七分左七合ヒテ中埋幅二尺ハナリ

青柳勇次郎朝堯墳(墓家書ナリ)

辞世

のさるべき身さかさ井のわとし舟

さし潮もあひ引潮もあひ

蜀山人書

の裏面

銘勇次郎碑陰

詩佛老人并曾家額

苗而不秀其誰使之非種不好不得天時

可曾以言の許々路としらへおもひ六波

よを左架沙のふふわうせり 盛西

青柳氏のいしけをま人をいたみて

あしの子の露消のちるかたみ哉 壺山

彼岸へ影さかさ井や花筏 湖十

文化八年辛未閏二月二十一日

孝子 青柳喜三郎茂章建之

金粟院過去帳

文化八年閏二月廿日

櫻樹院 眞相春夢誠士 六果

西國旅之 青柳文藏息

文化十三年丙子三月六日

梅櫻院 如意妙政誠婦

眞崎 青柳文藏婦

天保十年亥三月十日 重石所

青柳齋 東里茂明誠士

青柳文藏妻



此田現存  
不

萬山村内  
六字ナリ

金舞院本堂前向欄間数枚 小木札掲げ

永代寄進  
於當村宮川田宮ノ後ニテ所

田を及三前二歩 青柳氏

金五兩 鷲山 新倉其四郎

并嘉樹數十株  
文化八年末年閏二月

金五兩 上原敷 新倉其四郎

庭前敷石 寺拜修廣

田置小松敷 金五兩 青柳氏

障子七拾餘本紙  
庭前地中東西椽替

金五兩二歩 鷲山 新倉儀兵衛

青柳文藏ノ妻・新倉氏ナリ

青柳文藏の養子喜三ノ父ニ從テ公事師の業を學びしが放蕩多し

ハを廢せ令て別居せしめら喜三郎深川の松井田子下等まりみせの妓樓を

閉てきて振たりしが天保水野越前守の政治改革ニ因テ妓樓を傳せられ

しかるに川の親を前子小林を料理筆屋のありしを六十兩を以テ

移り住ます料理屋を以テ又海苔の産樹を以テ筆と以テ方ら他人

所有の産屋の差所人を以テ又公事師を以テ之を辨合すて誣判子

他人の十兩を以テ之を辨合すて廿年許りしが筆屋の業

ハ他き海苔ノ根失し差所を止められ再び深川に移り妻を假定

好徳の也り手とまり喜三ノ遂に死す子を亡ぶ六十二年暮り

甜水を以テ之を辨合すて其時に其の時に死すて其時に其の時に死すて

感張り在り  
ぎ辨り也也  
系と高き  
子は極く

此賊難く  
會ひし社  
治部を以て  
日かせし方  
節の甚しき  
子固きことあり

文花喜三郎を別居せしめて後祐次やを奪ひて嗣を社次中茂年  
鳥取沖に傍り本居を開きて文花と獨り泉戸に住せり一夜  
四人の賊侵入す文花と金銭を椽の下或は押間を以て隠し  
て藏せしが雇漢あり其を知り其夫告ぐ賊を昂古其夫  
りて此喜三郎を奪ひて戻せしもう文花抵抗せしむ賊之を  
を斬り金銭令えて千八百兩を奪ひて去る錢の重きを因みて  
跡を尋ねるに食食の所し其を跡見して錢を此へてつ境天子  
品川の天王橋の陰を石のみとふ茶屋に入り只酒食し酔ひ  
て睡りし家の主人捕手の名ありしが其の聲を聞て怪しきを  
看破して傳せり賊麻の風を為す金銀を包みたるを搜りて

(根岸木村製)

睡りて居たり筆を以て千五百兩奪ひて三百兩減したるを之良  
子監へて錢を以て一棧に令え文花を返すせられたり  
文花中賊に斬られし疵を病むを二年に及ぶ刺の疵を死せり  
文花を極めて候りて下女の押陣の時を俗の断片より掃き去  
るるをかれを叱しちると云ふ文花四十二年より始めて金に朱の  
朱を置ひたりと信ふ世にありし事想ふべし文花幸人を好まざ  
買女をのみ喜三郎としたりと云ふ喜三郎數人あり其れを雇を介ち夫を持たせて  
右二天保三年喜三郎が品川に移りし時九年よりして下女より  
十九年まで他へちりし佐藤まきの住よりとく明治四十四年  
七十九年より東京喜三郎の事佐久河山百十坊地を現住し候

屋敷の屋敷を世傳す

文花の秋養子祐次郎の長男祐次郎質堂を継ぎしが放蕩子  
して産を破り横濱の函館(原喜三郎)子安預とすしと云ふ其年  
祐次郎の代を青柳文庫の孫目録録ありしが敷低  
どしたり文庫碑の物物其所の唐紙子張りて煤け居たりと  
其男カニ取りて悔とて死せり

古青柳カニ郎三郎

(根岸木村製)

七月刻成、江戸北澤貞助發行、

二年木坂を刊板とあり、卷首に、陸奥鎮守村東里青柳文

藏茂明<sup>著</sup>とあり、~~其書~~見たり然る時、文藏の文會

の今子存たるものを青柳倉記一巻あり、後裔青柳勝の家より邊

文藏の妻新倉氏一子を継ぐ、男次郎朝堯とす、六歳より

夫より文藏其女姪の子喜三郎を郷里松川村より迎へて、養子

とせしが喜三郎放蕩ありしかば、品川子別居せしめ、百戸の借金

賃料と若干の資本金とを分ち、後金賃を世傳とす、<sup>此後</sup>文藏又武

州以企郡太郎丸村田幡宗頼の子を養ひて嗣とす、(文久元年其子)

三月十七日没、年四十四、其子祐次郎嗣とす、弟祐次郎(初名

竹次郎)後を承く、(明治二十二年四月十日、六十七歳没)其長子金太





郵便はかき

東京下谷根岸  
御行、松西  
大槻文彦様



伊勢齋助

印刷局製送

逓信省發行

啓者本行支集碑文已送  
呈請貴府轉呈馬御史  
查核成案元正示  
教文一紙如左  
備有冊簿以便查核  
此布  
宣統元年正月  
宣統元年正月

